菊埜井雙紙

二扁

中

208
12
682

国立国会図書館　　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

凌霜俚談 菊廼井草紙 巻之五

江戸 爲永春水著

○

偖れ拝酒屋の小七ハ七度が奸計と六露志らず。
菊の井にあふるの姉しさまにまんまと計ひ出せ哀
が窪へおもむき久々にて菊の井にあひ積る咄の
去の夜の明安く東雲告る鶏の寿にこゝろを慕
流にして一寸切らるゝも二寸切らるゝもおなすゞ夏と。

明治三十六 明大

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

終に居續となり家にかへらず。廓にあるなり十日
ばかりにおよびたれば小三湯とたゞめ現れ出後の
上にていよ〳〵勘當にきまりけり。かくしも志らず
小七は此ほどより居續の酒びたしに前好きにひも
るれと七居がたらひにて賀籠に其の世家に
かへれば かねて待のふけし 喜ぶれば 犯小三へは改めて
勘當のうし 言渡しなる後に小七もえらり かく
あらんとは覚悟せし 喜ぶから。今更に猶つ是何

返す詞もなく其侭に立上り出行んとせしかば彼の
妾出頃は外もまで小七を送りいでしきぞうし出公
細ふ出しめしぬれんが。又よきに折から私が犯且形さぬ
へ出来成いてたれば出勘當のゆゑる事ふべしと。
いと深切に言ふから懐より金子十両とりしと其は
あまりおゆけれども。わんの私の志にいへば旅網交にて
もそのいのふ助になりしまへと渡とるがし小七に
たしなれば。小七は深きことは志らず。世にうれしく

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

おもひおしいたゞき彼の金子を懷中して。何はともあるく
立去る爰に又小七と言号せし武部文之進が
娘おきてハ小七が勘當うけしおのむきと呼ぶてある
ゆもあらはじ夜昼とるく泣あるしけるが或夜客に
小七が行来ゆくゑぬるよしを書置して跡を忘ふて
何はともあるく六命　一ゑはバ文之進が驚ゑおわるこ
あらずといへども。さずが武士のせんかたなく手侶に
打るゝる夫ハさてあれ山科屋ハ菊の井小七に

こゝろはしより且暮にあんじくらしける所に例の
鈴木屋より小七がふたゝゝりと届けるはバ飛びたゝ
だるゝ甚びつく。しらく間遅しと憂下せバ手文書に
曰。勘當うけてせんかたなく當地が立去るよしを
志るし名殘おしきハ山くなはど。おもふて詮なれ今
の身の上命ごとにあるなるバ。又のあふせも為べきて。
そはのこせめて力草。なまなるの名殘にあの君んにハ。
未練もおこりはハんと恥りしく。しりふる袖が家とるが。

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

紙ぬりのよふ事切て書並くふことを家男とも。まこ
筆ふ道のかたことも。おもひ人をしてみけるみぞ。菊の
井汲せんあへず。いふよいふ事ぬ心の内。余所に見る
目もいじらしく。皆あつて泣目ぬたらひ菊チヤ喫へ
ませぬ小七さ夜。眼んでかへらぬ夏なるがら。さアとハ強
面男の心せめて別れよ一ト目ると筆もし見りする
なるバ。まこ可笑もあるべきよ。せつないうるしい夫の無
此方ハ苦界にせんかたも。泣より外ハなかくよ。かゝる

なげきのあらずとも言号ある小七さ夜。迚も夫婦
にならぬ身の中て苦労ぬせうよりも死て未来の
弊アをバ楽しむうたがましならん。そこ夏の報
も。どことあてどく書残し。使りさへなる身のいんぐ
こがなる路で爺さ夜や嫁さ夜のさぞおなげ所ハいう
ならん。世に頼こなる家男のうへ。先ぐ不孝の罪
科ハ。なるしぬへといくかけて。髪利逆手に持並し
既にうつうよと見へける折しも。周章て来る茶やの男

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

茶や「菊の井さんへ。紅舎の一お客が今こゝと名指て。いそがしくとも立かへるそれと言ながら菊の井ハ心ならねど若男ハ爰ぞと是非なく表に入る時。身ごしらへして待間さへ覚束なく死ぬる事ハ六ツかしく仏入ありて身も一年に程近く結しからざる大尽客昔風俗の出立にて座敷へ打通れバ。幇間芸妓が口車まわりのよいも山吹の花の色にゆぎさけんと騒ぐまつる座敷に夜もふけるまに

およびなる。それと心得若い者おくづけふといふまでの八百万代の神達もいとなどゞしてかへりみ数の井ハ心ならずとくどもせんかたなく彼の客と打ふしたるど今宵ハおりおりしくつらのいきまとて嫁ぎけど。客もあえてこれ応ぜんまず。何のまろみく打ちとて。ズやく結びるまきくのあハ時おりハうとおきこむぞ。客の寝れきとくんぐなる。然るに生て二ツハあつきバ大にようこびよふねのかほそりとりのてしとぞ年ふろうよと形くなれバ。かの客へてくれねおいてうしろざまに菊の井とあつるを立ちらうどろきねバあそんでこそと身ともかくと男力に動きぞ

客「やア〳〵早まりる菊の井どの。いかなることなれど。死なんと覚悟極めしハよく〳〵の事なるべし。死ハ一旦にて遂安く生ハかたしと聖人の如く。死でうるへねるる

とも一寸のびまゝバ廣い世界。どふともあるが浮世の
あるきゝ。私がしづめて菊の井どの。とつくり思案を
きつしやまゝ下。いまゝて何といらへきへ。泪先でろ女子
氣の。せんうこ泣目とおもらひきく「いづくのお方か
ぞんじませねど。名染もうまいまゝ下をよふその
よふに店源切に。いふて下さる志。うまゝうごぎんす
かこだけるい。定めしおまへのお心でハ狂気とも痴人
ものともおぼさまんが。死でうるハぬ訳といふハ二世も

三世もうまらじといふかしくるまゝ人にいうるるまゝの
縁ふしまや。あきもあるまゝもせぬ中のまして種まで
ゆどせしとふつまてらまゝ。蛮小女よろくるまゝ菊の
おやうこまゝ。そまゝといふまゝびせんうこるくとてもるまゝ
身とあきてうめて死ふと覚悟せし打から。仲の下
るる給まやがしらせに繋れ暫しが間死を当まり
しも苦界の是非るきさ何とぞお慈悲に見のがして
死せてこゝトふししづむ始終と吹て彼の客ハ小

膝が下と打るゝ 実一アヽ思ひきや荊棘の林に
まれるゝ貞操烈女良家にまれるゝおとゝぶ夫
公何とか包まん家とそハかんこゝ二世とかゝし
ゝる小七が実父小兵衛といふもの悴小七が身が色
に惑溺しての放蕩無頼変く呉凡人にあれど
それとそれとても吹入ぎ孫にかれは先達て武
部氏なる貞女ともいふて夫婦にしてる身のかく
まで媒行と餘示に凡のうしおくときハ泰山の

おもも面目なく。よん所なく勘當せし。犯のなげきハ
いかるらん。公のうちが思ひ居て下されト。差の洞に
菊の井もきく「さてハさやうにあるまたるゝそふとハ志ら
ぎ最苦なり。さぞかしお後の立つらん。堪忍してト
浣久れハ小兵衛ハともに泣目とたらひ 実「何の夫が
浣言まる事か。世が世であらバ嫁男といふべき筈
それぞとも知ひ是ぬが浮世の義理氏程なのか
に嘆が吹バ悴がこれを舎せしと。吹どもとなり

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

例り多き。浮川行の流れの身は。成しかゝるねとゝ
より。年がいもなれ伊達衣裳大尽客となりおの
せておん身が仏とさだりしよ。彼しよ増る貞女の
鑑。嘆きよこゞれず孝悌の。小七が種と母ぜせしからハ
孽へ甘ぶ其ハ勘當し久離切ても孫じやもの。何の
凡捨ゝ人うより恋る事て身受して。初
孫の親ゝ凡る。仏底なりとおもふ其ハ姨し泪は
菊の井ハ乳もなるく言うれて。呉ふしおがむだろり

なり。其より小七ハさだそく山しろやの亭主とまれき。菊の井が身受
の夏分おぼしよおぼしびけるおどきさのあが。ぜとしどろまめやすつあ
けるなる其ハ。ていしまもいさのの日けとなりて菊の井が身のしろ百ぬまてしまひ紙
まとおぼ其ハ小七がよろこびおくるるチ。紀そライよかどようちのせてかゆて
小七が源右ゝよゆと立おきし。五月のかたりの別蕪菊の井が主ぬせ。男女一
おんとそくおれて。何くるかしそやしるいたくのあハおきてと各と段
こゝの苦労なくしらしけるうち。遊る其ハ安産して男子とゆけ。其ハ小太
郎と名づけ。小七がよろこびなぎりなく大切よりそだてなるが光陰矢のごとく
とやくも三年のまれなるて
小太郎三才よぞなりよける ○爰よまたその頃當所の代官よ。
大山軍蔵といふものあり。しが国の守の何某ぞの
近しき一族なりれバ。其威勢つよきまに不法
行ひ多かりれ其下ども其ハ其ハ人

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

ゐるりゝ人見ば。非美非度のふるまひとそゐしまゐる
此軍務かれかこちのむくつげゐるにハ似ず猶の外
色好こゝにて菊の井が廓にあつましころより通ひ
人見ばいつもつ見るくのこゝもそゐしゐるがさのつ比
愛に住居まる事が吹まり人と相に無玉章
とかゝハせ仏の丈の切るるといく送り人見ばおきくハ
絶てゝ手にこもふ見ば里にあつまし昔さへ仏に
志ゝがハざろにましてかく身侶にゐるまし事ゐ見ば。

封も切らず手侶にかへし人見ば軍務ハ猶こゝに
志ゐに。折くハ別莊きてこりさゐぐの物が送り
ゐどゝて。とかくにお菊といどこゝゐるぞうるさ人見。

○

去る程にお菊ハ只。朝夕小太郎が成長が楽しこ。
命ごにあるゐるが。また小七ふも遇るの。ゐりかや
せんと操がまゐり。身ハそ死尼のこちふて。髪も化
粧も打並て。月日と送るぞ衣見ゐり。毎日見ゐ

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

犯の小三郎。孫の顔見ゑ風呂屋の戻りと。お菊が方
ゑ立寄まいバ。お菊ハ其まゝと立りとゞ。きく「とまいく
お爺さゐ。ゑふハいつもより遅いゆゑいかふあんじ
ましたゝ。コレお三お爺さゐへ早ふお茶ハ上ゆまゝ下ゆゑバ
小三郎ハおしとゞめ 小三へ イヤくわふ今湯屋で茶もこ
んと呑で来ましたゝト 袂から鰥やらん紙に包し抱ひ出し とまいハ昨日さる
お屋敷へ往て黄ふて戻りて菓子じやが。もんと甘ふ
なふてよいの程ゑ。ゐふぐめゑ。ゆゑて下さまゝ。そふして

ゐふぐハどこへ行ましたゝ きく「アイ今とろくと寐くゝゑ
よりて母うくのるで下へ寐させておきましたゝ。起こ
るら目覚しゑ母ゑませう。大体よろこぶ事じやで
ざりますまい。あがくうござりますト およろこへバ。
小三へもいつより機嫌よく 小三へ そまいハよいるのじや。イヤ
モウこるくの丹誠で。虫ゝつかぶらせぬハ大ていやおく
かくの事じやるい。ましがこふして毎日くこん舞ふも。
坊ゑゐめが顔が見たさ。祖父さゐくとましが帰る時。

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

跡逐ぬ見るを。猶が一ちいよるべて。さて二ヱ丁ヤ アノ世ヤ
命めか。まんそくで内に居おつてるら。こゝろをも坊
主をも。天下晴まして内へおいて。朝夕侍におとふのに。
不孝者めが親に苦労かけ。嫁や孫にまで抱と
共まるハ。えんなあいつがまる夏と思や。ほしや悔さてく
夜がこぶまぬ日とてハ。ごぎりませぬ。アヽ昔の人の孫
まて發句とせうにいつて通り。雪の夜や不孝者めが
居り所と。わんに雪につけ。夜に泣け。忘るゝ知ぬハご

さら祿ど。浮世の義理ハ是非もないまゝ。手内にハ
あいつめも方ぐ流浪して塩が踏ておつてるらバ初
時より。ほしらが志らぬ学文しおつて。聖人の道と云ら
と習ふてもの。其人間にもるまおつて。親に報ん
で。詳夏しおつてるら。親じやもの子じやもの。赦さいで
何と志ませふ。そふしてるらバこゝろをも必ほるくハ
まろふまい。尤あいつめにハ子細あつて武部文進の
れむすめ子と。嫁にもらふ約束してるまじ。その嫁の

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

おきてこどのも。悴めが跡が来てふて。家出されてこれど。
其浮絶へて寄信もなければ。とまもいかぐなられしから
行来志ましも。そまといふも皆悴が業。譬へ又もふ悴
めがどのようなる事がありて。まだとて。小太郎といふ者の
あることなるべし。かなるまず行来の事が案じ入て。頻かて
下さるなト。深切なる小三人が詞。お菊ハ今文を見ずて
なるべし。報も語あけず泣いてる。泪のあとより小三人に寄ひ
きく「実の親とてもおとがぬ法教。親子が楽く暮しのも

皆あるべしのお蔭由来。譬へ死でも此法教ハ。なんの志
まう志ましませぬ。そまとは対ても小太郎が。友達所の
とてさまに呵られるのと見破して。なせまにしふハとて
さまがないのでどざる。どのようなまたらしてもおくてら
ましても大変なるい。とてさまよんでと無理いふて泣のと
吹バ此病が。たゞもさくなうでおぎりまゐらとな
げハ小三人も倶に。知てんのなるべしまもせびなり。暫く
みて泣目とたらひ 小三人「コレお菊モウ泣きやんな床を

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

あまたハ洋しきあり。善るのがあまたハ悪い事がある。人間
菊夏寒蕊が馬。まこと今の憂をむかしがたりにする
事もあらう。モウく何もいとやらぬ。そまたてうハ城ぬ
に。風ひかさぬよふに用心さしやまた。まこと翌月舞に来
ませふト。子孫の関にいたがくと家家がさしてゑる。
折から来るハ意味ぬ。身ハ煩悩の大山軍兵安内
もせずに打ちまり。火体のをとりくどうと居り。集「コレ
お菊。そなたハ強面ものドやぞや。廓に居る時かからら

此軍兵が雨の降る夜も雪の歌も。いとうで通ふ八丁
堤。意味ハとて誰五ふ所の代官をも勤る者が破
をもつまで兵一人彼のお花にハあらねども。百夜ハ
ゆ三年ごし。通ひつめまどつのに意度笑ひ顔をも
見せずして。そまたから小七に会ひ子をもふけた
年分。アノ小七ハ勘当うけ。行衛ハ
小三ヘが身らひ此所へ見ずせおくのと志ろ。人をと
頼んで夜を送り。まこと月夕に来て打つけに寝ど

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

是までなくなりて返るの咲せしと見る紀情者なり。今日は
是乖く口説つゆ。おまとまるびくりるびりぬり二ツは四
のあいさわ成咲ふが為に来たりは丸と定めて返言
者やまとコレお菊おまが丸にさへ者ごがくば今日から来
身が奥方氏なくて丸の輿の身の出世さすまバ小さ
は男ぶ。小太郎は子も同せん。行末扉男に出ふべきや。
小七が真成出ひ切り。おまに者ごがふ丸なるゝ。アノ差髪
の小さ成たゞめ。一家門活計観乐又否ごといく

切らバ桃酒やの家倉没収し当地成逐拂憂目
とアルさるハまたてく中丸と定めて返事とせよト。お
どつすりつ口説ふぞ。お菊も今ハせんなくなく丸と
極め成をとふくて一淫れふ当時肩成なるゝ人
もう紀軍義さ成左程までに思ふて小さるおとろと。
何の仇におりひませう。さるゝがら。かなり安ハ男の丸。
アノ山科成に清とめしおり。小七さ成に出て丸に
深き中となり。比翼連理とちぎりあい。二世も二世も

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

かはらじと記請拵紙も取りかし。子までなしたる
夫婦の中が。ふりと捨てさぞ今頃ハおのふ女に添
寝して。ほとゝぎが夏ハなかくに愛となりたん恨めしや。
頼むかいなき人心。あなたさまも其まゝより。又来ぐハ
増花に。こんなんかなしさに然と強面まだ行しハ。
女心の一ト筋に拙き悪癖のまゝすかぐ。なるしのへと
ようこそハ軍務吹て心も空 軍「イヤモウそふいふそなさ
の心とハ愛にも志らぬ氣思ひ。語るも面伏せるがら。

大師さまの法圖も日にハ幾度占屋さん。雛の卦
の出ぬとちからぞと思ひしらせし今月の今。そなたの
生ごろ吹からハ生まるゝてもろまらぬ夫婦。嫉しの
ぞやト抱き身心も漫の折らしに。しろうハ是来る
是人の仲間いの戸明るもあはたごしく 仲「お貝邪
とまゝお出るさまとまゝすらう。此今殿さまの急用
あつまそ。片山源内さまお出。早々お位して立後を
ときびしい御身でござります。重系あつてハ貝邪の

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

越度。片時も早くトせつかる。軍務うつかり。あき
れはて。志バし物ともいはざりしか。お菊ハ手づめの
道るくうれしさ耳よりせきくせけバ。軍務実よ
もと手点頭 軍 志ろうバ今宵五ツ成お屋かるまず
待て居るべし。仏残して太山ハ小ゆゑと法にて立ける。
お菊ハ臨成見送りて。天のあくへと喜びしが又来る
夏ハ必定なり。のがれがくるゝ今宵のせつた男と
まうせてハ生死も志れぬ。小七さ夏へ言訳くてず。さり

とて仏ハ志てがハ孫バ。小三人さ夏の九男の九雑義とふ
も憂しいとゝぬも法らし武蔵あぶ。かゝる時ふや
人ハ死ぬ山科屋にて小七さ夏の勧酒のよし。吹て酔。
既に覚悟なきとめし此男。小三清さ夏のおるきけで
生るがらくし此年月死て操な全ふせん。さハさり
るがらコレが為死。まだ母うくと三子なる。アノ小七
郎がさぞうしよ。母と弱孫んいぢらしや。寝がれと
コレ是に今一度とさしのぞ死てハ是と泣ふし。

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

[illegible]子まとり清いて。[illegible]不覺まとりこぐ。植山
[illegible]の[illegible]さへ思ひ[illegible]てあ[illegible]り。時刻
うつりて軍[illegible]が又もや来るハかくとの[illegible]しも
[illegible]の泡と[illegible]せこまぐと。委細の[illegible]と書
のこゝぬ

[illegible]一筆出残しうくと[illegible]まで
[illegible]の[illegible]海山

[illegible]がてくぞんじうし。[illegible]
頃より。代[illegible]軍[illegible]
あるよ[illegible]
その上[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

おほ世にあるんぎんかけはよし。嘆も
おそろしきユミの眼く左右にしてハ
悲しみ仇にて報ずるどうぜん天台の
とがめも空おそろしく思ひよこしかね
ひまく、五川に身と志めし底の水層
るゝと宗りしく。海山の此悲ハ送らぐ
此るげきかけはるゝ未来のわども
いがぐと案じりしく。とけて名残おし

きハ小さ郎るゝにてくゝとしてゝる
流めてハぐるんぜる身の朝夕さぞ
かしきてひくたんと。とまれて瓜に
うくりしく中おれさきに此るゝハ山く
に此度ぞ浪ども海に籠のたてと
さえ見ちかゝはまく。あらく
中殊しく先立人不孝のごんハ
いくえ母も此面るし下さるべくと

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682
ガラス使用

208
12
682

めでたくうしく

きくか

祝父ゟ

かくの如くしてめて。状筥に封ぬつけ。立ぬんとせし
うどもさすがそ石孫のおしまれて因て時ぬうつしけれ。

菊廼井双帋巻之五終

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用

国立国会図書館　菊廼井草紙 4編 208-682

ガラス使用